



まちづくり広報誌

あらかわ Vol. 11

Topics

・協議会活動紹介 ・あらかわ歴史さんぽ ・あらかわ伝言板



2016年度あらかわ地区まちづくり協議会通常総会

4月27日(水)、荒川地区公民館を会場に通常総会が開催され、収支決算や事業計画、収支予算や役員の変更など、5つの議案が承認されました。

役員の変更では、協議会設立以来4年間にわたり理事長を務めていただきました海老江の会田健次氏が退任し、新しく荒島の齋藤富一氏(前副理事長)が就任されました。新たなメンバーも加わり、新体制で荒川地区のさらなる発展を目指します！



新理事長の齋藤富一氏

【新役員】

理事長	齋藤 富一氏
副理事長	渡辺 悦子氏
副理事長	松本 善衛氏
監事	武士俣 馨氏
監事	遠山八重子氏

あらかわ地区まちづくり協議会

事業部会



◆冒険遊び場づくり



子どもたち自身が遊びを感じ、考え、遊ぶことのできる場を創出する取り組み。

7月は運動公園を会場に、斜面を活用した「ウォータースライダー」など、水遊びを中心に楽しんでもらいました。

8月は、旧荒島保育園でミニキャンプを開催。飯ごうを使ってご飯を炊き、持ち寄った材料で作った闇カレーを堪能。夜は満点の星空の下、キャンプファイヤーで盛り上がりました。

10月は、ピザ窯を使って焼き芋やピザづくりに挑戦！秋の味覚を堪能しながら、おもいっきり外遊びを満喫してもらいました。

来年2月には冬編を予定しています。



冒険遊び場



◆風かおる丘ハーブメイツあらかわ

協議会メンバー4名にサポーターの皆さん47名が加わり「風かおる丘ハーブメイツあらかわ」を立ち上げ、ラベンダーを中心に数種類のハーブを栽培。6月18日(土)～7月3日(日)の間、「ラベンダーフェスティバル」を開催しました。

期間中の土・日曜日には、摘み取り体験やハーブcafé、ラベンダー関連グッズの販売やコンサートなど様々な催しを行い、1,500人を超す来場者数を記録。ラベンダーの取り組みとその魅力を大勢の皆さんに知っていただく機会になりました。10月16日(日)には荒川商工業祭に出店し、ラベンダーやハーブを使った商品販売。収穫物を利用して様々な商品開発に取り組むなど、活動の幅を広げています。



ラベンダーフェスティバル

大人気！
「ラベンダー石けん」を
常時販売します♪

- ・価格…1個700円(税込み)
- ・お買い求め先…荒川支所地域振興課 自治振興室 (TEL 0254-62-3102)



◆みらいファンド助成事業公開審査会

5月22日(日)、荒川支所の旧議場において、「あらかわみらいファンド助成事業」の公開審査会が開催され、一般部門では、銘菓を作って「清流荒川」をPRする事業や伝統芸能ブランド化事業、子どもたちの思い出づくり事業の3事業のプレゼンテーションが行われました。審査委員からは厳しい質問も投げかけられていましたが、それぞれの団体が抱えている「地域を元気にしたい!」という熱い思いは、審査委員を始め傍聴されたみなさんにも伝わったことでしょう。取り組みの詳細については、チャレンジ部門の2事業と合わせ次号でご紹介します。



パワーポイントのクオリティーの高さが注目を集めた「荒川伝統芸能ブランド化プロジェクトvol.2」



◆高坪山周辺活動団体等懇談会

10月1日(土)、高坪山山麓の虚空蔵山荘を会場に、周辺で様々な活動を行っている皆さんが集まり第3回懇談会を開催しました。この日は岐阜県高山市で里山整備や自然エネルギー活用で活躍されている山崎昌彦氏から取り組みを紹介いただき、参加者は話に耳を傾けながら、お互いの活動状況や将来構想などに話を弾ませました。



NPO法人を設立し、太陽光、風力、省エネ、小水力、バイオマス、地域通貨などに取り組む山崎氏

「あらかわスイーツコンテスト」

今年で4回目を迎えた「あらかわスイーツコンテスト」には、市内外から155点の応募をいただきました。こども・おとな各部門から計10点の作品を選考し、地区内5菓子店が商品化。10月1日～11月3日の期間限定(※店舗によっては延長販売もあり)で好評販売中です。また、10月16日の荒川商工業祭では表彰式及びPR販売会を開催し、大勢のみなさんにお集まりいただきました。コンテストにご応募いただいた皆さんを始め、あらかわスイーツをお買い求めいただいた皆さん、そしてご協賛いただきました関係各位に感謝申し上げます。

◆あらかわスイーツプロジェクト



「夢のあらかわ氷&カクテル」

8月5日(金)、村上市あらかわ大祭にて、あらかわスイーツプロジェクトチーム特製「夢のあらかわ氷&カクテル」を販売しました。販売開始から祭りが終わるまで、買い求めるお客さんの行列が続く大盛況ぶりとなりました。



◆あらかわご馳走プロジェクト

27年度より食生活改善推進委員協議会荒川支部のみなさんとタイアップし、荒川地区の素材を使用したご当地料理「あらかわご馳走」の開発に着手しました。

何度も試作や試食を重ね、視察に出向いたり、プロの盛り付けを学んだりし、ようやく完成させ、11月10日に開催するいなご馳走祭りで、金屋の大雄寺を会場に30名のお客様に提供します(※満員御礼)。今後は、もっと多くの皆さんに「あらかわご馳走」を召しあがっていただける機会を提供したいと考えています。



あらかわ歴史さんぽ

坂町駅・駅前篇 第1部

戦時下を駆け抜けた機関車

文 横山卓哉(支援・情報部会)

今年、米坂線全線開通から80周年を迎えた。米坂線全線開通は、荒川地区の近現代史上において非常に大きな出来事であった。多くの人々はそれを遠い昔の出来事と認識しているかも知れないが、今日を生きる幾人かの人々はそれに伴う変化を肌で知っている。今回の「あらかわ歴史さんぽ」は、坂町駅ならびに坂町機関区を舞台の中心として取り上げ、拙筆ながら坂町駅の開業から終戦直後の混乱期までの時代を関係者達の語るところなどを交えつつ見ていきたいと思う。

坂町駅の開業と坂町機関区の開設

まずは坂町駅の開業から坂町機関区の開設あたりまでの沿革をざっと眺めてみることにする。村上線中条～村上間開通に伴って坂町駅が開業するのは遡って大正3年(1914)、第一次世界大戦勃発の年である。昭和6年(1931)に米坂西線坂町～越後下関間が開業、翌々年の昭和8年(1933)に坂町駅に機関車駐泊所が設置され、昭和11年(1936)に米坂線全線開通となるわけであるが、米坂線全線開通により坂町駅の結節点としての重要性が大きく高まったと言える。そして昭和13年(1938)に坂町機関区が開設され、構内も大きく拡張、村上駅が担っていた機関機能も移管される。既に日中戦争が始まり(1937～)、国家総動員法の施行が目前に控えた時期のことである。

近年、米スタンフォード大学が日本占領時に米軍が接収した地形図をWeb公開したのだが、坂町駅付近が含まれる図郭¹⁾は昭和6年要部修正であって、1947年の空中写真と比較すると高山町～荒川支所の辺りが機関区設置後に開発されたことが伺える。実際、機関区関係者の宿舎や独身寮などがあったのだという。

学徒に支えられた戦時下の貨物輸送

『坂町機関区開設20周年記念写真帖』²⁾の巻末には、「その後戦時体制下に入り、裏縦貫線の輸送力は俄かに増大したが、いわゆる人的資源、物的資源は漸く枯渇し、学徒動員を見、機関車は電燈装置もなくして毎日重い軍臨を牽引したことも今は忘れ難い思い出である」³⁾との記述がある。坂町機関区の開設にあたっては新津や長岡、米沢などから熟練職員の出向もあったが、太平洋戦争開戦(1941～)による戦線拡大や戦況悪化に伴って機関区職員なども戦場に送られることとなり、女性乗務員や学徒勤労動員というカタチで補填されていた。後で紹介する佐藤一男氏がそうであったように、14歳くらいの少年が坂町機関区においても動員されていたのであった。

山形県の滑川鉱山と板谷峠の文化的景観について論じた栗野(2008)は「採掘された鉄鉱石は、トロッコや架空索道などによって奥羽本線の峠駅まで運ばれたあと、貨物列車に積まれ、米沢や坂町を経由して東新潟港まで行き、そののち船で八幡製鉄所まで運ばれていった。こうして滑川鉱山に始まる「鉄の道」は、峠駅からは文字どおり「鉄道」をたどることになる」⁴⁾と述べている。昭和13年(1938)には現在でいうところの山形県小国町で日本電興(株)が合金鉄生産を開始するなど、米坂線全線開通を契機に一気に工業化が進み、米坂線はそれら製品の輸送も担ったようである。先述の軍臨(軍事物資輸送臨時列車)にこれらが含まれるのは適当であろうと思われる。ここに挙げたのは米坂線を利用した輸送の一例に過ぎないが、米坂線開通のインパクトを垣間見ることができる。

【年表】坂町駅開業から坂町機関区設置まで

1914.11	村上線：中条～村上間開通	坂町駅開業
1924.07	羽越線：新津～秋田間全通	
1931.08	米坂西線：坂町～越後下関間開通	
1933.08	坂町駅に機関車駐泊所設置	
1936.08	米坂線：坂町～米沢間全通	
1936.08	米坂線：坂町～米沢間全通	
1938.03	坂町駅構内拡張、坂町機関区開設	



▲旧坂町駅本屋正面(撮影時期未詳)

入口上部の看板には左横書きで「交通安全宣言県」とある。昭和37年の「交通安全県」宣言に関係しているように思われるが、定かではない。

米艦載機による坂町空襲

第二次世界大戦末期の昭和20年（1945）7月17日の午前10時～11時頃、米軍艦載機F6F“ヘルキャット”とF4U“コルセア”からなる十数機の編隊が新潟県の上空に侵入し、新潟飛行場や坂町駅、天王新田駅（現:月岡駅）などを襲撃した。既に同年5月以降はB-29爆撃機が新潟港の港湾封鎖を目的に頻繁に往来しており（関川村方面より飛来し、坂町上空で進路を変えて新潟方面へ向かうルートもあったという⁵⁾、直江津では同年5月にB-29による空爆で死者も出ているが、新潟県に艦載機が来襲したのはこれが初めてだったようである。

この襲撃と後日起こった長岡大空襲に関して、当時坂町機関区に勤務していた佐藤一男氏（当時14歳）が平成14年（2002）7月5日付および7月12日付の『いわふね新聞』においてその経験を語っている（右図）。佐藤氏の語るところでは、坂町駅近辺を攻撃したのは単機であり、初めて聞くエンジン音に、近づいて来たら手を振ろうかななどと思っていたところ銃撃してきたのだという。空襲の翌日（7月18日）付の『新潟日報』の記事によると、この艦載機の編隊は山形県南部より侵入し、二隊に分かれて攻撃を行ったようである。同紙はまた、警報が鳴っても買い物行列が崩れないほどに新潟市民が油断していたことを戒めている。佐藤氏や買い物客の反応は、この時点まで地上攻撃にさらされなかった故のものであり、佐藤氏が「ついさっきまで何の変哲もない穏やかな日常だった光景は、とんでもない有様になってしまいました」⁶⁾と振り返るように、一瞬にして戦争という状況が叩きつけられたのであった。

総務省の報告によると、この17日の空襲で新潟飛行場の施設の一部と輸送機3機が破壊されたが、新潟市では死者は出ていないとされる⁷⁾。しかしながら、坂町駅の襲撃では3名が死亡しており、米軍が接收した新潟鉄道局がまとめたらしい資料⁸⁾には、坂町駅襲撃の時刻は10時37分、飛来機数は5、分岐器3組と待合室が被弾、機関車中破1小破2、貨車中破3小破9、死者3名重軽傷者2名と記載されている。佐藤氏が「不幸中の幸いだったのは、旅客列車の発着がない時間だったことです」^{前掲6)}と語るのを裏付けるように、先の米軍接收資料では客車被害0となっている。

後に坂町機関区の機関士となる上野康二氏は当時小学校2年生であり、学校の帰りにこの空襲があったと語る。遠山医院に負傷者達が運ばれたことや、駅前の木工所が火事になったこと、真鍮製の葉莢がバラバラ落ちていて後に拾って玩具にしたことなどを覚えているという。余談だが、上野氏の父は機関区で修繕に携わっており、長岡で使用された焼夷弾の殻さえ修繕の材料として用立てていたという。上野氏が坂町機関区に勤務するようになってからも、ボイラー室の壁などに銃撃の跡が残っていたのだという。

仮に戦争が長引いていたら、坂町駅は攻撃目標として設定され一層の打撃を被っていたのかもしれない。それは、各地の港湾が封鎖され、太平洋側諸地域が激しい攻撃を受けた後においては、酒田方面および米沢方面との合流・分岐点である坂町は要衝性を増していたといえるからである。

話がそれるが、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震において東北の太平洋側諸地域が壊滅的な被害を受けた際、坂町は支援物資等輸送の経路地として要衝性を増したことがある。この時の輸送の主役は自動車に取って代わられていたのだが、幾分類似した状況が戦争末期にもあったのである。



▲『いわふね新聞』2015年7月5日付および2015年7月12日付に掲載された記事

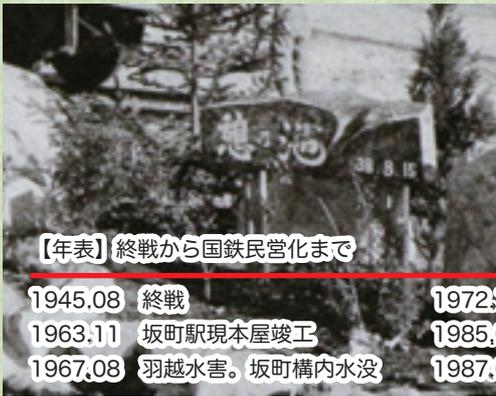
佐藤一男氏による体験談の記事。こうした戦争の記憶を語れる人は年々少なくなってしまっている。場所によっては資料が乏しかったり、所在が掴みにくいこともままあるため、当時の状況は忘失や埋没してしまう恐れがある。



▲終戦後に米軍が撮影した坂町駅付近の写真

【出所】

国土地理院「地図・空中写真閲覧サービスより。
1947/10/31米軍撮影（USA-M437- 2-68）」



【年表】終戦から国鉄民営化まで

1945.08	終戦	1972.10	羽越線電化。蒸気機関車運行廃止
1963.11	坂町駅現本屋竣工	1985.03	坂町機関区廃止。東新潟機関区派出所に
1967.08	羽越水害。坂町構内水没	1987.04	国鉄分割民営化。JRに移行

終戦から復興へ

昭和20年（1945）8月15日。18歳の宮脇俊三⁹⁾は坂町行の列車を待っていた。疎開先の村上へ戻る途中、今泉駅で終戦を告げる玉音放送を聴くこととなった宮脇は、『時刻表昭和史』において次のように綴っている¹⁰⁾。

放送が終わっても、人びとは黙ったまま棒のように立っていた。ラジオの前を離れてよいかどうか迷っているようでもあった。目まいがするような真夏の蝉しぐれの正午であった。

時は止っていたが汽車は走っていた。

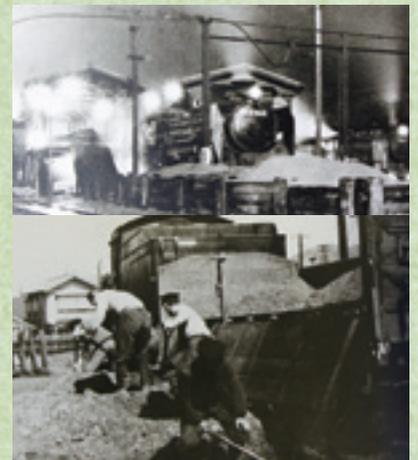
まもなく女子の改札係が坂町行が来ると告げた。父と私は今泉駅のホームに立って、米沢発坂町行の米坂線の列車が入って来るのを待った。こんなときでも汽車が走るのか、私は信じられない思いがしていた。

けれども、坂町行109列車は入ってきた。

その後、宮脇は坂町駅で乗り換えて村上に帰り、風呂を沸かす。これが示唆するところは、坂町駅および坂町機関区、それを支える職員達もまた、その務めを全うしていたことである。田川炭鉱と専用線で結ばれた五十川駅（鼠ヶ関～鶴岡の間にある）が終戦も間もない8月17日に操業再開したという話もあり¹¹⁾、そうであれば羽越線の新津—酒田間を担う坂町機関区は当然貨車を引かせるために汽車を走らせていただろう。先に挙げた『坂町機関区開設20周年記念写真帖』では、1958年時の状況として「終戦後日本経済の立直りと共に絶え間ない臨貨運転が続いている」¹²⁾としており、坂町機関区は戦中・戦後とほぼ止むことなく人や物、地域を結び付けてきたのであると言えよう。

8月15日を境に汽車は戦後を牽引していく。戦後直後の食糧問題に関しては新潟県の米穀供出が果たした役割は大きかったが（その輸送における鉄道の役割も大きかった）、永江（2006）によれば、それは「赤字搬出」ですらあったという¹³⁾。また、戦後のインフレに供米制度が十分ついていけなかった事は、供米制度を避けて市場に流す「ヤミ米」の発生の一因となった。こうした事から、食料を巡るいざこざや狼藉は全国各地で散見され、坂町駅においても「ヤミ米」を取り締まろうとする警察と、それを出荷しようとする者達との間でトラブルが起きていたりする。なお、永江（2006）は1947年10月の新潟県行幸で昭和天皇が供米状況の視察にきた時の状況を報じた『新潟日報』の記事を引用しているが、それによると昭和天皇は「うず高く積まれた“荒川米”の山を満足気にご覧になり」¹⁴⁾ 供出を労ったという。

1950年代に入ると食料事情や石炭事情はだいぶ良くなり、日本は復興の道を歩んでいくこととなる。坂町機関区で機関士を務めた富樫宇栄一氏は「昭和30年代が坂町機関区が最も華やいでいた時期だろう」と振り返る。昭和33年（1958）の坂町機関区は、乗務員125名、非乗務員82名、臨時雇用員27名と、開設時のほぼ倍の人員を擁しており、加えて貨車の仕分・組成なども担った坂町駅も200名ほど職員を抱えていたというから、富樫氏が「ここは鉄道のまちだった」と語るのも頷ける。坂町駅が今の姿に建替えられたのが昭和38年（1963）であり、昭和47年（1972）に羽越線が電化されてSL運行が廃止された。「東洋の奇跡」と称された復興—高度経済成長期にあたるのが1945年末—1973年末であるから、坂町機関区に属していた蒸気機関車達は、まさに激動の時代を駆け抜けていった存在だったわけである。



【写真上】給炭中と思しきD511099。【写真下】無蓋車への積込風景。

あとがき

本稿は内容不十分で走り書きの域を出ないところもあるが、何がしかの興味・関心を読者に抱かせられたなら幸いである。関心のある向きは、インターネットや様々な文献を辿ることで、より多くの情報や写真を見つけることができるだろう。惜しむらくは、一方で埋没し、忘失していくものも多いことである。

歴史を保存し、学ぶことは大いに結構なことである。加えて、それを糧として考えることはより善いことであると筆者は考える。

謝辞

「あらかわ歴史さんぽ 坂町駅・駅前篇」の構想・作成にあたり、多くの方の協力を賜った。坂町機関区の元職員である富樫宇栄一氏、上野康二氏、森山隆氏、機関区と縁の深かった「高勇」の高橋和子氏には、機関区内外の様子をはじめ、業務内容や空襲時のことなど、多岐に渡る話をしてくださった上に貴重な資料を閲覧させて頂き、感謝が尽きないところである。話の幾らかは未使用ないし次回掲載分に回ることとなったが、この場を借りて謝意を表したい。また、記事の画像を掲載する事を快く了承して下さった佐藤一男氏および、著作権元のいわふね新聞社にも御礼申し上げたい。



▲坂町駅正面左手の広場にある「平和記念の碑」

坂町駅周辺の空襲から半世紀を契機に建設の機運が高まり、平成9年(1997)に建立された。正面には平和への祈りが大きく刻まれており、裏面には坂町空襲のあらましなどが刻まれている。



▲昭和15年(1940)玉川口脱線事故の様子

1940年3月5日、米坂線玉川口駅付近で起きた事故。直前に起きた雪崩で破壊された荒川橋梁に列車がさしかかり、機関車と貨車2台客車2台が荒川に転落。死者11名、負傷者多数という惨事になった。とりわけ米坂線は雪との闘いを強いられる路線である。

【参考文献】

- 栗野宏(2008)「鉄の道と鉄道-滑川鉱山と板谷峠の文化的景観」山形大学紀要人文科学16(3):p33-54。
永江雅和(2006)「占領期新潟県の米穀供出問題」専修大学社会科学研究所編.社会科学年報40:p211-227

【注記】

- 1) 大日本帝國陸地測量部発行〈明治四十四年測圖昭和六年要部修正測圖〉五万分一地形圖『中條』【URL】<https://purl.stanford.edu/nc255rw0684>。
- 2) 坂町機関区の関係者向けに贈られた品で、本号で使用した写真の多くはここから借用させて頂いた。
- 3) 原文ママ
- 4) 栗野宏(2008)、「鉄の道と鉄道-滑川鉱山と板谷峠の文化的景観」山形大学紀要人文科学16(3):p.33より引用。
- 5) 国立国会図書館デジタルコレクションより。【URL】<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/4002551>
「Nos. 256, 262, 268, 269, 275, 276, 282, 292, 296 304, 305, 311, 318, 324 and 331, Kobe-Osaka Fukuoka, Fusan, Geijitsu, Genzan, Hamada Konan, Masan, Shimonoseki Straits, Nanao Fushiki, Naoetsu, Rashin, Reisui, Seishin Niigata, Yuya Wan, Senzaki, Hagi, Maizuru Miyazu, Obama and Tsuruga, 9-10 July-14-1. August 1945. Report No. 2-b (46) and (47), USSBS Index; Section 7」
- 6) 『いわふね新聞』2015年7月5日(第671号)「戦後70年 記憶をつむいで」より。
- 7) 総務省HP 新潟市における戦災の状況(新潟県)より。
【URL】http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/daijinkanbou/sensai/situation/state/shinetsu_01.html
- 8) 国立国会図書館デジタルコレクションより。【URL】<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8820204>
「Railroad notes and work sheets for the Hiroshima, Nogata, and Niigata division (part Japanese) .: Report No. 54q, USSBS Index Section 2」
- 9) 後に中央公論社にて『中央公論』や『婦人公論』の編集長を務め、紀行作家としても名を馳せることとなる。
- 10) 本稿では文庫版の『増補版 時刻表昭和史』から引用した。宮脇俊三『増補版 時刻表昭和史』2001年.角川書店.p249-250
- 11) 残念ながら筆者は、ウィキペディア上の記事「田川炭鉱」を裏付ける資料は見つけられなかった。
【URL】<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%B0%E5%B7%9D%E7%82%AD%E9%89%B1>
また、この記事によると同年12月から翌年2月末まで石炭不足対策のため国鉄職員が炭鉱労働に派遣されているという。
- 12) 前掲2)
- 13) 新潟県内においても都市部や山間部は食糧事情が悪く配給の欠配なども生じていたが、県外への移出が要求されていた。
- 14) 孫引きとなってしまったが、永江(2006)によれば『新潟日報』1947年10月10日付の記事らしい。永江(2006)、「占領期新潟県の米穀供出問題」専修大学社会科学研究所編.社会科学年報40:p218より引用。



(文責:横山)

あらかわフォトギャラリー



齊藤 正幸氏「河口の夕ぐれ」



伊藤 昇氏「豊かな水辺」



太田 誠二氏「清流の恵みを受けて」



花野 省子氏「鮭ぼや取り」

※このコーナーで掲載した写真は、「えちご清流荒川フォトコンテスト」の応募作品の中から抜粋したものです。

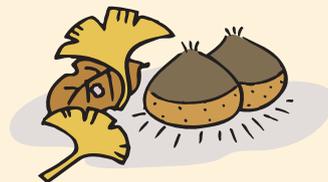
あらかわ伝言板

「あらしまらベンダーひろば」はじめます！

- ◆日時…11月10日から毎週木曜日 9:00～12:00(予定)
- ◆場所…旧荒島保育園
- ◆内容…子育て中のママさん・パパさんや日中お孫さんの面倒を見ているおばあちゃんやおじいちゃんなど、どなたでもご利用いただけます。お好きな時に来ておしゃべりしたり、子どもと遊んだり、自由なひと時をお過ごしください。
- ◆お問い合わせ…あらかわ地区まちづくり協議会
TEL 62-3181

きらきらイルミネーション点灯中☆

- ◆日時…29年1月中旬まで(点灯17:00～24:00)
- ◆場所…JR坂町駅及び駅前通り



編集後記

今号のいち押しは「あらかわ歴史さんぽ・坂町駅前編」です。取材を通し、国鉄(機関区)OBのみなさんから様々なお話を聞かせていただきましたが、当時の情景を思い浮かべながら熱く語る口ぶりからは、月日が流れてもあせることのない鉄道に対する思いと愛情、そして技術者としての誇りを感じることができました。みなさん、とてもカッコよかったです。(たじ)

まちづくり協議会では、
あらかわ地区のいろんな話題を募集しています！

お気軽に、TEL・FAX 0254-62-3181
Mail love-arakawa@bz04.plala.or.jp
URL : <http://www.love-arakawa.bz-service.net/>